



新谷モレウコンレク(裕也)さん(28)
＝民族共生象徴空間(ウボポイ)職員

— イランカラマテ、ご出身を教えてください。

生まれも育ちも札幌市です。小学校3年生の時に両親らがアイヌの音楽グループを作って、私もおどりで参加するようになりました。自分がアイヌだと知ったのもその時です。毎週金曜日は、おどりを3時間練習していました。

以前は札幌市のアイヌ文化交流センター・ピリカコタンで働いたり、古い映像や録音資料で昔の歌やおどりを勉強するグループに参加していました。— 今は胆振管内白老町にお住まいなんですね。

おどりのグループにいた時から白老町にはよく行っていました。2014年から暮らし始め、アイヌ民族博物館でアイヌ文化を学ぶ研修を受けました。今は来年4月にオープンするウボポイの職員として働いています。

ウボポイではアイヌ文化を研究したり、そこで分

かったことを来場者に楽しみながら学んでもらうお手伝いをします。

私は料理が好きなので、来場者と一緒にアイヌ料理を作ったり、いろいろなアイヌ料理を食べてもらったりする体験学習のメニューを考えています。最近、サケのくん製を入れたスープを作ってすぐおいしかったので、秋のメニューにしようと考えています。

— 読者のみなさんに伝えたいことは。

一言でアイヌ文化といっても、木ぼりやししゅう、歌、おどり、植物を暮らしに役立てる知識など本当にいろいろあります。知れば楽しいことばかりです。ウボポイで、アイヌの食文化を味わってもらうことが楽しみです。ぜひ遊びに来てください！

◆ このコーナーでは、さまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。

タンベエヒラムマン?

■ シト

アイヌ民族の料理の一つ、シトを知っていますか？ シトを知っていますか？ シトを知っていますか？

「きみこれ知ってる？」の意味。きねでついて粉にします。粉ができたお湯と一緒に練って団子状にし、ゆで完成です。そのまま食べるとか、昆布で作ったたれや、つぶした筋子とあえて食べたりもします。

魚を欲しそうにするカラス。パンカンクフは毎日分けてやった



金の子犬・銀の子犬

＝樺太西海岸鵜城の話

(「和田文治郎 樺太アイヌ説話集 3」より)

ある時、パンカンクフの私は、川にかけたやな(川の中に組み立てて、魚をとる道具)を見に行くと、魚がたくさんかかっていた。そこへ1羽のカラスがやってきて、魚を欲しそうにしています。1ぴき洗って放つてやると、カラスはそれをついばんで帰りました。次の日も、また魚がたくさんかかっていた。すると、また同じカラスがきて、魚を欲しそうにするので、また1ぴき洗って放つてやりました。

家に帰ってから「明日はカラスの国へ行ってみよう」と思いました。次の日はやなの所へ行かず、山おくに登って行きました。いくつも山をこえて分け入って行くと、山の中なかに立派な家を見つけました。

家のそばに、金と銀の子犬がつかれていて「コンカニカラカラ、ウオーウオー(金がコロコロ、うおーうおー)、シロカニカラカラ、ウオーウオー(銀がコロコロ、うおーうおー)、パンカンクフアファンアファン、ウオーウオー(川下の者よ、入れ入れ)」とほえました。家へ入ってみると、ろのそばに大きなおじいさんとおばあさんが座っています。

パンカンクフの子犬は山のような金と銀の FUN をした。マネしたパンカンクフは…



それからパンカンクフはパンカンクフをまねて漁をしに行き、カラスが来ると、洗いもせずに魚を放りなげました。そうしてカラスの国へ行き、子犬をゆすり受けたまでは良かったものの、帰り道、たおれた木で道がふさがった所へ来ると、団子もあたえず、ただ子犬の頭をなぐって歩かせました。そうしてすっかり道に迷ってしまい、あるところで川にぶつかりました。近くにいたキツネに「これはなんという川だ」とたずねると、キツネは答えてにげてしましました。そんなことが3回もつづき、気づいてみると、持っていた荷物もなにもすっかりなくなつて

いました。さんざん歩き回り、くたびれはてて家へ着きました。ある日、子犬が FUN をしました。パンカンクフがよろこんで見てみると、ただ砂の FUN をするだけで、宝は出てきませんでした。やがてパンカンクフの家には食料もなくなりました。腹を立てて「あつちの犬は宝物の FUN をするのに、うちの宝も出さずに砂ばかりでてるがやる」と悪態をついて、子犬を殺して捨ててしましました。そして、とうとう自分もつゝ死ににしまったといつこととです。

同様の話 他地域、外国にも

今回のような金銀を出す子犬の話は、千歳市や登別市にも伝えられています。北海道のアイヌ民族は、この2人組を「バナウンベ・ペナウンベ」や「バナウンベ・ペナウンベ」と呼びます。2人の話は、日本でもおなじみの正直じいさん・いじわるじいさんの話を思い出しますね。こうした2人組が登場する話は、沖縄、朝鮮半島や中国台湾、ミヤマーなど、いろいろな国や地域に見られます。

これは樺太(サハリン)出身の女性が、戦後に北海道に移住してから語ったお話です。パンカンクフは川下に住む者、パンカンクフは川上に住む者という意味で、いつもコンビで登場します。パンカンクフは親切で正直。パンカンクフはけちでずるくて、いつもパンカンクフをうらやましがってまねをしますが、さいごは大失敗して死んでしましました。



山おくにあるカラスの国をたずねると、神のような夫婦から金と銀の子犬をもらった

